

この書からの発見を記す。

一、西田は、ベルクソンを高く評価した。それを象徴するのが九鬼周造の問いだ。「20世紀最高の哲学者は誰か？」という問いに対して西田は「現在、哲学者はベルクソン一人だ！」とはつきり言った（『わが師わが友』澤瀉久敬著。ベルクソンの純粹持続が自己の純粹経験と近似しているので驚きだったのであろう。西田はさらに、ベルクソンの『創造的進化』（一九〇七）に感銘を受けている。ベルクソンの「生の躍進」、實在の運動は、西田哲学の根本と思えば、西田がわかりやすい。實在の運動を、反省、自覚して概念化、論理化したのが、中期、後期の哲学である。創作の意義は、アリストテレスを参考に行っているが、實在の表出を創造とするのはベルクソンのである。藤田氏の書は、ベルクソン哲学から難解な西田哲学を理解しやすくする手引きを示している。

藤田正勝『人間・西田幾多郎——未完の哲学』（岩波書店、二〇〇一年一〇月）

現在の京都学派を代表する碩学の西田の評伝。すでに西田についての伝記は、西田の孫の上田久や西田の高弟が多々著しているが、この書は、西田の人間的苦悩（実存）に光を当ててゐる。ここが、従来の伝記と違うところである。全体は、四部、二二章からなる。四部の構成は次のようである。

- I 「それとも余甚だ喜はず」——禅から哲学へ
- II 「私の考えを論理化する端緒を得た」——「純粹経験」と「場所」
- III 「心身の軽きを覚ゆ」——「自己」から「世界」へ
- IV 「世界がレールになった」——東洋と西洋のはざままで

二、西田と夏目漱石との交信である。両者は、東大で二年間在学期間が重なり、カール・フロレンツのドイツ語の授業を受けた。英国留学中の漱石は西田から手紙を受け取っている。一九二一年漱石は国から文学博士号を授与されるが、文学が国の政策下に入ることに、御用文学になることに懸念して拒否した。西田は漱石の反発精神に快哉する。一方、西田は二年後、京大から文学博士を拒否せず受ける。漱石のような国家への反発心はなかったようだ。

三、西田は、京大助教に迎えられるが、二年間の期限付きだった。留学する教員の補充員（留守居）であった。今日、若い研究者の就職が厳しいが、西田も同様の苦勞をした。渡欧した友枝高彦は四年留学し、東京高等師範学校へ就職した。西田は継続とな

願（諸行往生）、第二十願（自力念仏往生）を経て、真実の願である第十八願（他力念仏往生）へとその信仰を深め行く過程である。武内はこれをニーチェの駱駝、獅子、赤子の三変容など様々な比喩によって語る。またヘーゲルの弁証法によって「第十八願は絶えず第二十願を自己疎外によって成立せしめつつ、またさらにそれを消滅契機として否定し、第十八願に転入せしめ続けねばならない」と述べている。これは他力の立場に立ちながらも、そのなかでなお捨てがたい自力の力に否応なく直面させられたときに起こる、絶えざる信仰のダイナミズムである。

田辺は晩年『懺悔道としての哲学』を書いた。その時手がかりにしたのが弟子・武内の『教行信証の哲学』だった。田辺は、その信仰の歩みにおいて徹底して悪を自覚し、自己を放棄するとう懺悔の道を歩いた親鸞に出会ったのである。本書は、こうした親鸞と京都学派（西田・田辺・武内）との関係を探る上でも、この上ない縁となるに違いない。

（司馬春英）